



Title	西ゲルマン諸語における「不定詞 + tun」迂言形の特徴
Author(s)	覚知, 頌春
Citation	独語独文学研究年報 = Nenpo. Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität, 44: 49-71
Issue Date	2018-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70504
Type	bulletin (article)
File Information	44_03_kakuchi.pdf



[Instructions for use](#)

西ゲルマン諸語における「不定詞+tun」迂言形の特徴

覚知頌春

1. 序¹

「不定詞+tun」迂言形とは、標準ドイツ語の動詞 tun 及びそれと語形的に対応する動詞が不定詞を支配する形式を指す。この迂言形は、tun に対応する動詞が失われた北ゲルマン諸語とゴート語には存在しないものの、西ゲルマン諸語では言語・方言の別を問わず広く見られる。西ゲルマン諸語において、「不定詞+tun」迂言形の用法は多岐にわたり、言語・方言間の差異は小さくない。言語・方言によっては動詞群の語順が異なり、「tun+不定詞」という右枝分かれ構造を取る場合もあるが、本稿では語順の問題には詳しく立ち入らない。本稿は、代表的な西ゲルマン語とドイツ語方言における「不定詞+tun」迂言形を参照し、その用法に共通する特徴を明らかにすることを目的とする。

以下、まず 2 節で西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞+tun」迂言形の用法を、続く 3 節でドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形の用法を概観する。その観察をもとに、4 節でそれらに共通する特徴を本稿のまとめとして提示する。

2. 標準語における「不定詞+tun」迂言形

本節では、西ゲルマン諸語の標準語における迂言形がどのような環境で使用されているかを見る。疑問文・否定文の形成などに使用される英語の do-迂言形は、文法化の点で他の迂言形を大きく引き離すため、本稿では扱わない。本節では、標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語、ルクセンブルク語、アフリカーンス語の 5 つを取り上げる。

2.1. 標準ドイツ語における tun-迂言形 : [INF + tun]

標準ドイツ語の辞書である Duden (1999) は、標準ドイツ語の tun-迂言形が本動詞を強調する際に使用されるとしている。Duden (1999) はその例として (1) (2) を挙げているが、本動詞を前域に置き、話題化・焦点化するもの (1) 以外は口語的である (umgangssprachlich) とされるという (2)。また、接続法の表示に用いられることもあるが、このような用法は方言的 (landschaftlich) とされるという (3)。

(1) hd. *Singen tu sie gerne.* (話題化・焦点化)

歌うことが、彼女は好きだ

Duden (1999: 3994)

(2) hd. *Ich tu bloß noch schnell die Blumen *gießen*. (強調 : 口語的)

私は急いで花に水をやる

Duden (1999: 3994)

¹ 本稿では以下の略号を使用する。afr. = アフリカーンス語、bair. = バイエレン方言、els. = アルザスドイツ語、hd. = 標準ドイツ語、lux. = ルクセンブルク語、md. = 中部ドイツ語、me. = 中英語、mhd. = 中高ドイツ語、mndl. = 中期オランダ語、nd. = 低地ドイツ語、ndl. = オランダ語、schwz. = スイスドイツ語、wfr. = 西フリジア語

(3) hd. *Das täte mich schon interessieren. (接続法 II の表示 : 方言的)

私はそれは面白いだろうと思います

Duden (1999: 3994)

(2) (3) では本動詞が右枠に置かれているが、このタイプの tun-迂言形が容認されないことは、他の文法書においても言及されている。標準ドイツ語の文法書である Engel (1991²) によると、本動詞を右枠に置く (4) のような tun-迂言形は日常語 (Alltagssprache)、幼児語 (Kindersprache) とされ、標準語としては容認されない。

(4) hd. *Er tut ja immer noch essen. (日常語・幼児語)

彼はまだ食べ続けている

Engel (1991²: 476)

2.2. オランダ語における doen-迂言形 : [doen + INF]

本動詞を右枠に置くタイプの迂言形が容認されない言語は、標準ドイツ語だけではない。Haeseryn et al. (1997: 1285) によると、オランダ語の doen-迂言形も本動詞の話題化・焦点化の際に使用されるが (5a)、動詞を右枠に置く例 (5b) は容認されないという。

(5a) ndl. Stelen deed die jongen anders nooit. (話題化・焦点化)

stehlen-INF tat der Junge sonst nie

盗みなど、そうでなければその少年は決してしなかった

Haeseryn et al. (1997: 1286)

(5b) ndl. *Die jongen deed anders nooit stelen.

der Junge tat sonst nie stehlen-INF

Haeseryn et al. (1997: 1286)

一方で、オランダ語の doen-迂言形は、使役構文としての用法を持っている (6)。使役用法の doen は、使役主の働きかけにより、動作主がある行動を自身の意図に関わらず行うという直接使役を表し、laten,hd. lassen を用いる使役と区別される。

(6) ndl. Dat doet mij dan weer aan mijn Moortje denken. (直接使役)

das tut mich dann wieder an mein Moortje denken-INF

それは私のモールチェを思い起こさせる

Frank (2013: 51)

本稿ではオランダ語の方言に詳しく立ち入らないが、標準オランダ語で容認されない (5b) のような doen-迂言形が、方言においては使用されるという記述もある。Barbiers (2008) によると doen-迂言形は、ベルギーのオランダ語方言では全く見られないものの、オランダ国内の方言においては使用される。オランダ南部 (リンブルフ、ブラーバント、ゼーラントなど) では、本動詞を右枠に置く例 (7) や疑問文 (8)、命令文 (9) の例が観察され、逆に北部 (フローニンゲン、ドレンテ、オーヴェルエイセルなど) では、完了

形 (10) の例が認められるという。

- (7) ndl. *Ik doe wel even de kopjes afwassen. (方言的)
ich tue wohl eben die Tässchen abwaschen-INF
私はそのカップを洗うよ Barbiere (2008: 52)
- (8) ndl. *Doet Marie elke avond dansen? (方言的)
tut Marie jeden Abend tanzen-INF
マリーは毎晩踊っているの? Barbiere (2008: 52)
- (9) ndl. *Doe het brood even snijden! (方言的)
tue das Brot eben schneiden-INF
ちょっとそのパンを切って Barbiere (2008: 53)
- (10) ndl. *Ik heb heel wat lopen gedaan. (方言的)
ich habe sehr etwas laufen-INF getan
私はかなり走った Barbiere (2008: 53)

2.3. 西フリジア語における **dwaan-迂言形** : [INF + dwaan]

西フリジア語において、hd. tun、ndl. doen に対応する動詞は **dwaan** であり、**dwaan-迂言形** は第 1 不定詞 (e-不定詞) とともに、本動詞の話題化・焦点化に用いられる (11a)。一方で、**tun-迂言形** や **doen-迂言形** と同じく、不定詞を右枠に置く構文は作ることができない。筆者は母語話者に対して (11b) の例文を提示したが、容認されなかった。

- (11a) wfr. Gripe docht men mei de hân. (話題化・焦点化)
greifen-INF tut man mit der Hand
つかむという行為は、手で行うものだ Bangma (1992: 56)
- (11b) wfr. *Men docht mei de hân gripe.
man tut mit der Hand greifen-INF

西フリジア語では、一部の動詞の不定詞が **dwaan** と結びつき、右枠に現れることがある (12)。しかし、(12) における **ynkeapjen** は、第 1 不定詞 (e-不定詞) ではなく第 2 不定詞 (en-不定詞) であることに留意されたい。動名詞 (gerundium) とも呼ばれる標準西フリジア語の第 2 不定詞 (en-不定詞) は、名詞的性格が強く、この構文は「動作名詞＋機能動詞」構文に近い。そのため、本稿では (12) の構文を **dwaan-迂言形** と見なさない。

- (12) wfr. In plotte minsken út 'e Súdwesthoeke dogge yn Snits ynkeapjen.
viele Menschen aus Súdwesthoeke tun in Snits Einkaufen
スュトヴェストフケから来たたくさんの人々がスニツで買い物をする
Bangma (1998: 74)

2.4. ルクセンブルク語における「不定詞+tun」迂言形

ルクセンブルク語の文法書である Schanen/Zimmer (2005) は、ルクセンブルク語の *doen* が接続法の表示に用いられている文を挙げている (13)。しかし、これは周辺のな用法であり、標準的とされるルクセンブルク語中央方言では現れないとされる。また、*tun*-迂言形、*doen*-迂言形、*dwaan*-迂言形で観察された本動詞の話題化・焦点化用法には、*maachen* ‚hd. *machen*‘ が使用され (14)²、*doen* は使用されない。

(13) lux. **Déit* en dach *léieren*.

täte er doch lernen-INF

彼が勉強してくれたらなあ

Schanen/Zimmer (2005: 46)

(14) lux. *Sangen mécht* se ganz gär!

singen-INF macht sie ganz gern

歌うことが、彼女はとても好きだ

2.5. アフリカーンス語における「不定詞+tun」迂言形

アフリカーンス語における「不定詞+tun」迂言形についての記述は、これまでのところほとんど見つかっていない。Langer (2001: 13) によれば、アフリカーンス語の動詞 *doen* は不定詞と迂言形を形成しないという。山藤顕氏 (北海道大学博士課程) が作成した『ハリー・ポッターと賢者の石』のアフリカーンス語訳 (Rowling 2000, 総語数 56828) をコーパスとして例文調査を行ったところ、全ての *doen* が本動詞として用いられており (15)、「不定詞+tun」迂言形は確認できなかった。

(15) afr. “Wat doen jy?” vra Ron.

was tust du fragt Ron

「何をしているの」とロンが尋ねる

Rowling (2000: 121)

2.6. 標準語における「不定詞+tun」迂言形のまとめ

以上、本節で扱った西ゲルマン諸語の標準語における「不定詞+tun」迂言形の用法をまとめ、その特徴を記述する。本節で扱った 5 つの標準語のうち、「不定詞+tun」迂言形の使用が確認できたのは、標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の 3 言語であり、ルクセンブルク語とアフリカーンス語においては、「不定詞+tun」迂言形の使

² 例文 (14) の調査は、西出佳代氏 (神戸大学専任講師) による。助動詞の用法の *maachen* に関して、母語話者の 1 人は、話法の助動詞などの「助動詞らしい」助動詞と、*maachen* の振る舞いが違うことに言及し、不定詞のみを用いる (14) の他に、より自然な文として不定詞を受ける代名詞を用いた文 (a) を提示したという。これは、*maachen* が取る不定詞の名詞性が高いことを示唆していると筆者は考える。

(a) lux. *Sangen, dat mécht* se ganz gär!

singen-INF das macht sie ganz gern

歌うことが、彼女はとても好きだ

用が確認できなかった。前者 3 言語の「不定詞+tun」迂言形には、本動詞の不定詞を左枠に置く話題化・焦点化用法が存在する点と、本動詞を右枠に置く例が容認されない点が共通している。Schwarz (2009: 11) によると、これには 3 言語の構造的特徴である V2 語順が関係しているという。V2 語順とは、主文の文頭位置を話題・焦点が占め(前域)、続く位置(左枠)に定動詞が置かれる語順を指す。この語順において、左枠には定動詞のみが置かれるのに対し、前域には名詞句(16a)、副詞句(16b)、前置詞句(16c)など、様々な要素が置かれる。

(16a) hd. *Sie* singt heute in der Halle.

彼女は今日ホールで歌う

Sie (名詞句)	singt	heute in der Halle.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

(16b) hd. *Heute* singt sie in der Halle.

今日、彼女はホールで歌う

Heute (副詞句)	singt	sie in der Halle.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

(16c) hd. *In der Halle* singt sie heute.

ホールで、彼女は今日歌う

In der Halle (前置詞句)	singt	sie heute.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

一方で、本動詞を際立たせるため、本動詞の不定詞を前域に置き話題・焦点として提示することがあるが(16d)、この時、左枠が空になるため、左枠を任意の動詞で占める必要性が生まれる。Schwarz (2009) によると、これが「不定詞+tun」迂言形を本動詞の話題化・焦点化に使う理由であり、同論文では「論理性」(Logik)と表現されている。これにより、左枠を tun で占める必要性のある (1) (5a) (11a) は適格と判断され、(2) (3) (4) (5b) (11b) は、本動詞で左枠を占めることができるという点で、迂言形を使用する必要がないと判断される。

(16d) hd. *Singen* ____ sie gerne.

Singen (動詞)	φ	sie gerne.
前域 (話題・焦点)	左枠 (定動詞)	中域

標準ドイツ語、オランダ語、西フリジア語の「不定詞+tun」迂言形が副文で使用できないことも(17a-c)、副文に話題化・焦点化の位置としての前域が存在せず、左枠が

補文標識に占められるという理由から説明することができる。

(17a) hd. *Er sagt, dass sie gerne singen tut.

彼女は歌うことが好きだと彼は言う

(17b) ndl. *Hij zegt dat die jongen anders nooit deed stelen.

er sagt dass der Junge sonst nie stehlen-INF tat

その若者はそうでなければ決して盗みなどしなかったと彼は言う

(17c) wfr.* Hy seit dat men mei de hân gripe docht.

er sagt dass man mit der Hand greifen-INF tut

つかむという行為は手で行うと彼は言う

Schwarz (2009) の言う「論理性」による制限について、筆者はこれを標準語が持つ高い規範意識による制限に読み替えられると考える。(2) (4) (5b) (11b) のように接続法を表している訳でもなく、左枠を占めている訳でもない迂言形は、使用の意図が明瞭ではない。規範意識は、多かれ少なかれ不明瞭な要素を排除する傾向にあり、そのためこうした制限が生じるのではないか。特に、標準ドイツ語の *tun*-迂言形は、17 世紀文法家を中心とした純化運動により排斥 (Stigmatisierung) された歴史を持つ (Langer 2001)。この排斥運動は、標準ドイツ語という規範言語の策定過程において起こった。少なくとも *tun*-迂言形においては、このような規範による影響が尾を引いていると考えられる。

3 言語の「不定詞+tun」迂言形の中で、オランダ語の *doen*-迂言形は使役用法を持つ。これは話題化・焦点化の迂言形と異なり、助動詞として使用される *doen* に、使役という態 (ヴォイス) に関する文法的意味が備わっている。使役用法の「不定詞+tun」迂言形は、西ゲルマン諸語の古語において広く使用されており、中高ドイツ語 (18)、中英語 (19)、中期オランダ語 (20) でその使用例が確認できる。これらの使役用法は、時代が下るにつれ他の動詞に取って代われ、今日ではまれな用法となった。例えば、Weiss (1956) によれば中高ドイツ語 *tuon* の使役用法は、*machen* に取って代わられたとされ、現代の標準語には残っていない。オランダ語の *doen*-迂言形は、古語の使役用法を引き継いだものと言える。先行研究ではしばしば、これらの使役用法において使役の動作主が省かれるようになり、その結果として語彙的意味を持たない透明な迂言形が派生したとされる。文に現れない意味上の動作主は、「誰かが」のような意味的重要度の低い名詞句で補われるようになり、さらに進んでこの潜在的名詞句が全く考慮されないような解釈も許容されるようになったという。以下の 3 例は、いずれも本動詞の動作主が省略されているが、「～させた」ではなく「～した」と訳しても大きく意味は変わらない。

(18) mhd. Sie thaten die turne malen.

sie taten den Turm malen-INF

彼らはその塔の絵を描かせた

Weiss (1956: 83)

- (19) me. The mayere of Norwych dede a-rest the baylly of Normandys.
der Bürgermeister von Norwich tat verhaften-INF den Adligen von Normandys
 ノリッチ市長はノルマンディーの代官を逮捕させた Davis (1971: 331)
- (20) mndl. ... ende willent scepnen, si sullen sin hus doen breken ...
und wollen Richter sie sollen sein Haus tun zerbrechen-INF
 そしてもし判事たちがそう望むなら、彼らは彼の家を壊させるだろう
 van der Horst (1998: 56)

標準語における「不定詞+tun」迂言形の用法を表1にまとめる。

表1：標準語における「不定詞+tun」迂言形の用法³

	標準ドイツ語	オランダ語	西フリジア語	ルクセンブルク語	アフリカーンス語
話題化・焦点化	○	○	○	×	?
接続法表示	×	—	—	×	—
使役	×	○	×	×	×

3. ドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形

本節では、ドイツ語の方言における「不定詞+tun」迂言形が使用される環境を見る。ドイツ語方言は、北から大きく低地ドイツ語、中部ドイツ語、上部ドイツ語に分かれ、本稿もこの区分に従うが、上部ドイツ語の迂言形については先行研究が豊富であるため、バイエルン方言、スイスドイツ語、アルザスドイツ語の3つに節を分けた。

3.1. 低地ドイツ語における doon-迂言形 [INF + doon]

低地ドイツ語 doon-迂言形の最大の特徴は、副文に大きく偏るという点である (Meyer 1983²: 104)。筆者が低地ドイツ語のコーパスを作成して (Kinau 1973; Grimm 1993, 1995; Rowling 2002)、doon-迂言形を調査したところ (覚知 印刷中)、主文 (21) (22) で16例、副文 (23) で542例の doon-迂言形が見られ、副文に偏る分布を確認できた (表2)。

- (21) nd. Un schrieben doo ick ook ne! (主文：本動詞前域：14例)
und schreiben-INF tue ich auch nicht
 そして、書くことも私はしない Kinau (1973: 131)

³ ○は当該の用法が存在することを、×は存在しないことを示す。また、?は情報が無いが、その用法の存在を否定できないことを、△は文法書などに言及はあるが、実際の頻度は少ない、もしくはその存在が疑わしいと筆者が判断したことを示す。—は、構造的な理由から当該用法がその言語において存在しえないことを示す。

- (22) nd. Dat Kind sehg so schön ut un dee den Jäger barmen; (主文 : 本動詞右枠 : 2 例)
das Kind sah so schön aus und tat den Jäger erbarmen-INF
 その子はとても美しかったので猟師に哀れみを起こさせた Grimm (1995: 10)
- (23) nd. Harry wünsch sik, dat he maal plinkern dä. (副文 : 542 例)
Harry wünschte sich dass er mal blinzeln-INF tat
 ハリーは彼が瞬きしてくれたらと思った Rowling (2002: 92)

表 2 : doon-迂言形が使用された統語的環境

	Kinau 1973	Grimm 1993, 1995	Rowling 2002	計
主文	6	2	8	16
副文	149	49	344	542
計	155	51	352	558

主文における doon-迂言形は、16 例のうち 14 例が本動詞を前域に置く例 (21) であり、2 例が本動詞を右枠に置く例 (22) であったが、Meyer (1983²: 104) によれば、(22) のような doon-迂言形は、低地ドイツ語の使用についての知識の欠落と見なされるという。

副文における doon-迂言形の使用について、Keseling (1968) は非現実のモダリティと進行相の aspekto 要因として挙げている。同論文は、インフォーマント調査において、非現実の *as wenn* ,hd. *als wenn* 節で、高い頻度で doon-迂言形が使用されることを確認し、doon-迂言形の使用には非現実的モダリティが関与していると指摘した。また、doon-迂言形が具象的 (*anschaulich*) な動詞とよく共起するという観察から、進行相の aspekto 要因も doon-迂言形の使用に関与していると指摘した。

一方で Rohdenburg (1986, 2002) は、副文における迂言形の使用に関し、音韻的要因と形態的要因を挙げている。音韻的用法に関して Rohdenburg (1986) は、低地ドイツ語においては、主強勢が文末から 3 音節目 (—◡◡) に来ることが好まれる韻律構造が存在すると主張し (図 1)、(24a-b) では理想的な韻律構造に沿う (24a) が好まれるとした。そこから同論文は、副文では 1 音節の doon が本動詞に後続することで最適な韻律が実現されるとして、音韻的要因に基づく韻律的用法を提示した。

図 1 : Rohdenburg (1986) が主張する低地ドイツ語において理想的な韻律構造

	Hauptakzent	Tonhöhenbewegung	
	Drittletzte	Zweitletzte	Letzte
... dat Willem as Schipper up unsen Neptun	BLIE- —	-ben ◡	dä. ◡

(24a) nd. ... dat Willem as Schipper up unsen Neptun BLIEben dä. (ㄷㄹㄹ)

dass Willem als Kapitän auf unserem Neptun bleiben-INF tat

ヴィレムが我々のネプチューン号の船長としてとどまったこと

Rohdenburg (1986: 90)

(24b) nd. ... dat Willem as Schipper up unsen Neptun BLEEV. (ㄷ)

dass Willem als Kapitän auf unserem Neptun blieb

さらに Rohdenburg (1986, 2002) は、低地ドイツ語の弱変化動詞が標準ドイツ語に比べ、表3のように曖昧な形態をとっていることを指摘し、形態的な要因に基づく時制表示用法を提示した。低地ドイツ語の弱変化動詞は、1・2 人称単数で現在形と過去形が同一の形式 (*maak, maakst*) になる。一方で、*doon* を定動詞として使用する *doon*-迂言形は、弱変化動詞の曖昧な形態を明示して時制を表すことができる。

表3：低地ドイツ語の弱変化・強変化動詞のパラダイム (Thies 2011: 56, 118)

	弱変化動詞 <i>maken</i> ‚hd. <i>machen</i> ‘	
	現在形	過去形
1 人称単数	<i>maak</i>	<i>maak</i>
2 人称単数	<i>maakst</i>	<i>maakst</i>
3 人称単数	<i>maakt</i>	<i>maak</i>
統一複数	<i>maakt</i>	<i>maken</i>

この他 Rohdenburg (1986) は、音素配列的に問題のある語形を避ける形態簡素化用法にも言及している。筆者は、共時的コーパスを用い、モダリティ・アスペクト・音韻・形態の4要因と *doon*-迂言形との関係を調査した。モダリティ・アスペクト・音韻が関与する文脈とそうでない文脈で、*doon*-迂言形の迂言形の使用率を調べると、両者の間にそれほど大きな差は出なかったが、形態的要因と *doon*-迂言形との関係を調べると、形態的要因が関与する文脈でより多くの *doon*-迂言形が使用されていた。また、音韻的要因は副文に偏る分布を説明できるという点でモダリティ・アスペクトよりも重要であると考え、筆者は覚知 (印刷中) において、低地ドイツ語の *doon*-迂言形の使用に関わる要因のうち、音韻・形態的要因が中核的要因であることを主張し、*doon*-迂言形が接辞的性格を持っているという仮説を提示した。

3.2. 中部ドイツ語における *don*-迂言形 : [INF + *don*]

中部ドイツ語 *don*-迂言形の用法に関して、西中部ドイツ語に属するラインフランケン方言の辞書である Müller (1964: 1447) は、*don*-迂言形が事実性の強調 (*Betonung der Tatsächlichkeit*) に用いられるとしている (25)。この点に関して、東中部ドイツ語に属するアルテンブルク方言の文法書である Weise (1900: 103) には、本動詞を前域に置き話

題化・焦点化するよりも、本動詞を右枠に置きレーマ化する方が多いという指摘がある。

(25) md. Ech don jo schrive. (wie es befohlen ist) (レーマ化 : ラインフランケン方言)

ich tue ja schreiben-INF

(言われた通り) 私は書いているよ

Müller (1964: 1447)

標準ドイツ語やルクセンブルク語では迂言形による接続法の表示は容認されなかったが、Müller (1964) 及び Schwarz (2009) によると、中部ドイツ語の don-迂言形は接続法 II の表示に使用されることがあるという (26) (27)。中部ドイツ語の接続法 II は、消失した接続法 I の用法を吸収したものである。また、Schwarz (2009: 29) では、未来表現としての用法 (28) が、Müller (1964: 1448) では、使役用法 (29) が挙げられている。

(26) md. I det was esse. (接続法 II (婉曲表現) : プファルツ方言)

ich täte etwas essen-INF

何か食べようと思っている

Schwarz (2009: 29)

(27) md. Er sat, er däht de Schuh wichse. (接続法 II (引用) : ラインフランケン方言)

er sagte er täte den Schuh wichsen-INF

彼はその靴を磨くと言った

Müller (1964: 1447)

(28) md. Mit meer dun ehr kee Mücke fange. (未来時制 : プファルツ方言)

mit mir tut ihr keine Mücke fangen-INF

私がいると君たちは好き勝手できないだろう

Schwarz (2009: 29)

(29) md. Enen lachen don (使役 : ラインフランケン方言)

einen lachen-INF tun

人を笑わせること

Müller (1964: 1448)

使用される統語環境には、平叙文の他に命令文 (30) と副文 (31) がある。Müller (1964: 1447) は、完了形の例 (32a) を挙げているが、一般的ではない (ungebräuchlich) とし、代用形として don-迂言形を使わない (32b) を載せている。

(30) md. Du dich nor nedd schnerre! (命令文 : 南ヘッセン方言)

tue dich nur nicht täuschen-INF

頼むから裏切らないで

Schwarz (2009: 29)

(31) md. Ech däht dir gern dat gen, wenn ech et selver han däht.

ich täte dir gern das geben-INF wenn ich es selber haben-INF täte

(副文 : ラインフランケン方言)

私自身がそれを持っていたら、喜んで君にあげただろうに Müller (1964: 1447)

(32a) md. *Ek höbb gedohn lihre. (完了形：ラインフランケン方言)

ich habe getan lernen-INF

Müller (1964: 1447)

(32b) md. Ech han geliht. (ラインフランケン方言)

ich habe gelernt

私は勉強した

Müller (1964: 1447)

その他、Schwarz (2009: 30) は、例文を挙げていないものの、don-迂言形が困難な語形の回避 (Vermeidung schwieriger Verbformen) に使用されるとしている。また、Müller (1964: 1447) には、don-迂言形が子どもだけでなく大人にも使用されるという記述がある。幼児語と判断されることもある標準ドイツ語の tun-迂言形と比較すると、中部ドイツ語の don-迂言形は、広く使用されており、規範の影響が小さいことがわかる。

3.3. 上部ドイツ語バイエルン方言における doa-迂言形：[INF + doa]

上部ドイツ語の東部を占めるバイエルン方言では、doa が迂言形を形成する。doa-迂言形の用法の1つとして、バイエルン方言の文法書である Merkle (1984²: 66) は、本動詞の不定詞を前置する話題化・焦点化用法を挙げている (33)。

(33) bair. Bfeiffä duàr i dà wås. (話題化・焦点化)

pfeifen-INF tue ich dir etwas

口笛を、私は君に少し吹こう

Merkle (1984²: 66)

さらに Merkle (1984²: 65) は、doa-迂言形の用法として接続法表示を挙げている (34a)。バイエルン方言の接続法は、中部ドイツ語と同じく、接続法 II が接続法 I を吸収したものである。標準ドイツ語と異なり、接続法 II の表示に *weàràd* ‚hd. würde‘ は、全く使われないという (34b)。

(34a) bair. I dààd schreim. (接続法 II (婉曲表現))

ich täte schreiben-INF

私は書こうと思っているのだが

Merkle (1984²: 65)

(34b) bair. *I weàràd schreim.

ich würde schreiben-INF

Merkle (1984²: 65)

Eroms (1998) は方言話者に対して、doa-迂言形、wean (hd. werden) -迂言形、単純形の3つのうち、どれを接続法の表示に使うかというテストを行った。Eroms (1998) が調査した例文を (35a-c) (36a-c) に載せる。最も好まれたのは、doa-迂言形を用いた (35a) (36a) の例であり、その選択率はそれぞれ 98%、89%であった (Eroms 1998: 146)。

- (35a) bair. I dad mi schama. (接続法 II : doa-迂言形)
ich täte mich schämen-INF Eroms (1998: 145)
- (35b) bair. I wuarad mi schama. (接続法 II : wean-迂言形)
ich würde mich schämen-INF Eroms (1998: 145)
- (35c) bair. I schamad mi. (接続法 II : 単純形)
ich schämte mich Eroms (1998: 145)
- (36a) bair. I dad iatz schlafa. (接続法 II : doa-迂言形)
ich täte etwas schlafen-INF Eroms (1998: 146)
- (36b) bair. I wuarad iatz schlafa. (接続法 II : wean-迂言形)
ich würde etwas schlafen-INF Eroms (1998: 146)
- (36c) bair. I schlafad iatz. (接続法 II : 単純形)
ich schliefe etwas Eroms (1998: 146)

接続法表示の他にも、Schwarz (2009) は、doa-迂言形が習慣相 (37)、進行相 (38) といったアスペクトの表示に用いられるという記述を載せている。

- (37) bair. I don gean d nodan vanga. (習慣相)
ich tue gern die Schlange fangen-INF
 私は蛇を捕まえるのが好きだ Schwarz (2009: 15)
- (38) bair. An ualauwa iss, wou a gwatia souha dad. (進行相)
ein Urlauber ist-es der ein Quartier suchen-INF tut
 あれは宿を探している休暇中の旅行者だ Schwarz (2009: 15)

Merkle (1984²: 66) によると、doa-迂言形には命令文の語調緩和用法があり、(39) の doa-迂言形には、命令文に親しみを加える効果があるとされる (klingt netter und verbindlicher)。同様に、Eroms (1998: 148) は、命令文で doa-迂言形がそれほど頻繁に使用されないとしながらも、それが広告のフレーズに用いられることから、「形式ばらない感じ」 (informality) や「自然さ」 (naturalness) を表していると指摘している。

- (39) bair. Duà scheë essn! (命令文の語調緩和)
tu schön essen-INF
 きれいに食べなさい! Merkle (1984²: 66)

この他 Schwarz (2009: 16) では、動詞屈折を避けるための用法 (Vermeidungsstrategie, wodurch sie sich gerne eig[e]ne Conjugation der übrigen Verba ersparen) が挙げられている。

doa-迂言形が使用される統語的環境には、主文の平叙文の他に命令文 (39) や疑問文、副文 (38) がある。Zehetner (1985: 151) は、命令文と疑問文における doa-迂言形がよく

使われる (geläufig) としている (40) (41)。一方で、副文の *doa*-迂言形は、Eroms (1984: 132) の調査によれば避けられる傾向にあるという (42)。また、Merkle (1984²: 66-67) によると、完了形で *doa*-迂言形は使用できず (43)、話法の助動詞を伴う場合は、話法の助動詞を話題化・焦点化しなければいけないという制約がある (44a-b)。しかし接続法では、その必要はなく (44c)、受動不定詞を支配する例も存在した (45)。

- (40) bair. *Dua* ned frëch wean! (命令文)
tu nicht frech werden-INF
 生意気になるんじゃないよ Zehetner (1985: 151)
- (41) bair. *Deamma* haid Kartn schbuin? (疑問文)
tun-wir heute Karten spielen-INF
 今日私たちがトランプする? Zehetner (1985: 151)
- (42) bair. I sog da no, obs heid kemma dan. (副文)
ich sage dir noch, ob-sie heute kommen-INF tun.
 私は君に彼らが今日来るかどうかを言う Eroms (1984: 130)
- (43) bair. *Mià ham awàdn dô. (完了形)
wir haben arbeiten-INF getan Merkle (1984²: 67)
- (44a) bair. *Du duàsà kenà. (話法の助動詞)
du tust können-INF Merkle (1984²: 66)
- (44b) bair. Kenà duàsà àiss. (話法の助動詞)
können-INF tust-du alles
 できるよ、君は何でも Merkle (1984²: 66)
- (44c) bair. Dees dààdsd glei kenà. (話法の助動詞 : 接続法)
das tätest-du gleich können-INF
 君はすぐにできるようになると思う Merkle (1984²: 66)
- (45) bair. I dààd gfràgd weàn. (受動の助動詞)
ich täte gefragt werden-INF
 私は尋ねられると思う Merkle (1984²: 64)

3.4. スイスドイツ語における *tue*-迂言形 : [tue + INF]

バイエルン方言と同じ上部ドイツ語に属するスイスドイツ語でも、*tue* が迂言形を形成する。ベルン方言とチューリヒ方言の文法書である Hodler (1969: 319)、Weber (1987: 249) は、*tue*-迂言形の話題化・焦点化用法を挙げている (46) (47)。

- (46) schwz. *Schaffe* tuet dä überhout nüt. (話題化・焦点化 : ベルン方言)
arbeiten-INF tut der überhaupt nicht
 働くということを、あの男は全くしない Hodler (1969: 319)

- (47) schwz. *Schryben und lääse tuen i gëërn, aber rächne nüüd.*
schreiben-INF und lesen-INF tue ich gern aber rechnen-INF nicht
 (話題化・焦点化：チューリヒ方言)
 読み書きは私は好きだけど、計算は嫌いだ Weber (1987: 93)

前掲の Hodler (1969: 320) と Weber (1987: 192)、及びベルン方言の文法書である Marti (1985: 154-155) とベルン方言の教科書である Pinheiro-Weber (2010: 108) は、tue-迂言形が接続法の表示に用いられると記述している。高地アレマン方言では接続法 I と II の区別がまだ残っているが、tue-迂言形はどちらの表示にも用いられる (48) (49) (50)。バイエルン方言と異なり、接続法の表示には *hd. werden* に当たる動詞 (ベルン方言 *wärde*、チューリヒ方言 *wèerde*) も使用される (Marti 1985: 154-155, Weber 1987: 192) (51) (52)。

- (48) schwz. *Dem Cheiser chlagen, wie's nen tieji gaan.* (接続法 I (引用)：ベルン方言)
dem Kaiser klagen wie-es einem tue gehen-INF
 皇帝にどのような状況であるかを嘆くこと Hodler (1969: 320)

- (49) schwz. *I tät das Outo verchouffe.* (接続法 II (婉曲表現)：ベルン方言)
ich täte das Auto verkaufen-INF
 私はその車を売ろうと思っているのだが Marti (1985: 156)

- (50) schwz. *I täät mi füürche.* (接続法 II (婉曲表現)：チューリヒ方言)
ich täte mich fürchten-INF
 私は怖いと思う Weber (1987: 192)

- (51) schwz. *Si säge, är wärđi das Hūus nächstents boue.*
sie sagen, er werde das Haus nächstens bauen-INF
 (wärde-迂言形：接続法 I (引用)：ベルン方言)
 彼らは彼が近いうちに家を建てると言っている Marti (1985: 155)

- (52) schwz. *I wuurd mi schäme.* (wèerde-迂言形：接続法 II (婉曲表現)：チューリヒ方言)
ich würde mich schämen-INF
 私は恥ずかしいと思う Weber (1987: 192)

Schwarz (2009: 21) によると、散発的にはあるが、tue-迂言形は習慣相 (53) や進行相 (54) といったアスペクトの表示に用いられるという。Schobinger (2001²: 28) も、tue-迂言形のアスペクト用法に言及しており、am-進行形の同等表現と記述している (55)。

- (53) schwz. *Das isch dä Maa, woni immer mit em tue rede.* (習慣相)
das ist der Mann wo-ich immer mit ihm tue reden-INF
 この人は、私がいつも一緒に話している人です Schwarz (2009: 21)

(54) schwz. Mir tüend grad es Bild ufhänke. (進行相)

wir tun gerade ein Bild aufhängen-INF

私たちはちょうど絵を掛けているところです

Schwarz (2009: 21)

(55) schwz. Er tuet läse. (= Er isch am läse) (進行相 : チューリヒ方言)

er tut lesen-INF

彼はちょうど本を読んでいるところだ

Schobinger (2001²: 28)

さらに Weber (1987 : 250) によると、スイスドイツ語の tue-迂言形は命令文と疑問文で語調緩和の役割を担うという (56) (57)。疑問文の語調緩和については、Schobinger (2001²: 28) も、tue-迂言形が控えめな依頼 (zurückhaltende Bitte) を表すと記述している。

(56) schwz. Tüend iez uufpasse! (命令文の語調緩和 : チューリヒ方言)

tut etwas aufpassen-INF

気を付けてください

Weber (1987: 250)

(57) schwz. Tüend er au öppis chraame? (疑問文の語調緩和 : チューリヒ方言)

tut ihr auch etwas kaufen-INF

君たち、新聞を取ってくれないかな

Weber (1987: 250)

スイスドイツ語のうち最高地アレマン方言 (Höchstalemannisch) では、tue が zum-不定詞を取り、使役の意味を表す (Schwarz 2009: 22, Hodler 1969: 319⁴) (58)。

(58) schwz. Das tuet 'nen z'pische. (使役 : グラオビュンデン方言)

das tut ihn zum-Keuchen

それは彼の息を上がらせる

Schwarz (2009: 23)

また、普通でない語形を回避するため (Vermeidung ungewohnter Formen) (59) や弱音節の連続を回避するため (Vermeidung einer Folge von unbetonten Silben) (60) に、tue-迂言形が使用されるという (Weber 1987: 249)。 (59) の本動詞 bäle は、語形変化させるのが一般的ではなく、人称変化するのを避けるため、tue-迂言形が使われるという。一方で(60) の uusföppele のように-ele や-ere で終わる動詞は、不定詞で弱音節が連続しており、それに変化語尾が付いた煩雑な語形を避けるため、tue-迂言形が使用されるという。

(59) schwz. De Hund tuet bäle.

der Hund tut bellen-INF

その犬は吠える

Weber (1987: 249)

⁴ Schwarz (2009) は最高地アレマン方言に限定しているが、Hodler (1969) は特にそのような限定を設けていないようである。

(60) schwz. Iez tuet er mi scho wider uusföppele

jetzt tut er mich schon wieder ausfoppen-INF

今彼は私をまたからかっている

Weber (1987: 249)

統語的環境については、平叙文の他、副文 (48) (53) や命令文 (56)、疑問文 (57) がある。副文の tue-迂言形に関し、Schönenberger/Penner (1995: 319) は、副文で tue-迂言形を使うと容認度が落ちることを指摘している (61)。筆者が Pinheiro-Weber (2010) を対象として行ったコーパス調査 (覚知 印刷中) でも、主文で 8 例の tue-迂言形が見られたのに対し、副文では 1 例も使用されていなかった。バイエルン方言の doa-迂言形と同じく、tue-迂言形も副文では避けられる傾向にあると言える。Hodler (1969: 319) には、スイスドイツ語の tue-迂言形が完了形と共起しないという記述があるが、これは使役用法には当てはまらず、Schwarz (2009) には完了形で使用される使役用法の例がある (62)。

(61) schwz. [?]dass er morn tuet schaffe. (副文)

dass er morgen tut arbeiten-INF

彼が明日働くこと

Schönenberger/Penner (1995: 319)

(62) schwz. Sie heind iro Stall tuon z'flättigun. (使役 : ヴァリス方言)

sie haben ihren Stall getan zum-Reinigen

彼らは彼らの畜舎を掃除させた

Schwarz (2009: 23)

3.5. アルザスドイツ語における迂言形 tüen/düen-迂言形 : [tüen/düen + INF]

上部ドイツ語のうち、フランスのアルザス地方で話される低地アレマン方言は、アルザスドイツ語と呼ばれる。アルザスドイツ語の tüen/düen-迂言形の特徴を記述した柴崎 (2014: 31) によると、tüen/düen-迂言形には「先行文との対比において後続文の動詞概念を強調する機能」があるといい、その例文として (63) が挙げられている。

(63) els. Ghèert han i s schò, aber glaube duen i s nit. (話題化・焦点化 : 南部アルザス語)

gehört habe ich es schon aber glauben-INF tue ich es nicht

聞いたよ、私はそれを。しかし信じることは、私はしない

柴崎 (2014: 31)

また、tüen/düen-迂言形は接続法の表示に用いられる (柴崎 2014: 40)。アルザスドイツ語には、接続法 I と接続法 II の両方が残っているが、その語形は一部の動詞⁵を除いて消失している。接続法の語形を欠く動詞において、tüen/düen の接続法 II の語形である tàt/dàt が接続法 I・接続法 II を表すという (64) (65)。

⁵ 接続法 I で残存している語形には seig (hd. sei), heig (hd. habe) が、接続法 II で残存している語形には wàr (hd. wäre), hätt (hd. hätte), gâb (hd. gäbe), kâm (hd. käme), sod (hd. sollte), kennt (hd. könnte), wisst (hd. wüsste), tàt/dàt (hd. täte) が挙げられる。

(64) els. Mi Pape säit nur immer, Ihr *täte* wie ei Loch *süffe*.

mein Papi sagt nur immer ihr tätet wie ein Loch saufen-INF

(接続法 II (引用) : 南部アルザス語)

私のパパはあなたが大酒飲みでいつもたくさん酒を飲むと言う

柴崎 (2014: 41)

(65) els. An eyrem Platz *tät* ich d'rno *üsstige*. (接続法 II (非現実) : ミュルーズアルザス語)

an eurem Platz täte ich dann aussteigen-INF

私があなたの立場なら手を引くよ

柴崎 (2014: 42)

他の上部ドイツ語方言同様、アルザスドイツ語の *tüen/düen*-迂言形は継続相 (66) や反復相 (67) といったアスペクトの表示に用いられるという (柴崎 2014: 39)。

(66) els. Drum frog ich das Biew'le, wu do *tüet steh*. (継続相 : 南部アルザス語)

darum frage ich das Bübchen der da tut stehen-INF

だから私はそこに立っている少年に尋ねる

柴崎 (2014: 39)

(67) els. M'r *düet* sich immer widder *treeschte*. (反復相 : 南部アルザス語)

man tut sich immer wieder trösten-INF

繰り返し何度も自分を慰め続ける

柴崎 (2014: 39)

アルザスドイツ語の *tüen/düen*-迂言形は、命令文と疑問文の語調緩和にも用いられる (68) (69)。柴崎 (2014: 38) によると、*tüen/düen*-迂言形の語調緩和用法は、無愛想あるいは性急な印象を与えるいわゆる命令的・尋問的口調を和らげており、標準ドイツ語の心態詞 *mal* に似た用法であるとされる。

(68) els. *Due* di e bitzeli *zämmenää!* (命令文の語調緩和 : パーゼルドイツ語)

tu dich ein bisschen zusammennehmen-INF

少し集中してちょうだい

柴崎 (2014: 38)

(69) els. *Tüet*'r dr'no *glugse*, wie-n-e Hühn? (疑問文の語調緩和 : 南部アルザス語)

tut-er dann Schluckauf-haben-INF wie-ein Huhn

彼はにわとりみたいにしゅっくりをしているの?

柴崎 (2014: 39)

その他、「音声的煩雑さを避ける機能」として (70) が挙げられている。柴崎 (2014: 36) によると、*-re*、*-le*、*-ne*、*-me* で終わる動詞で、アクセントの置かれぬ音節の連続を避けるため、*tüen/düen*-迂言形が使われるという。

(70) els. *Dien* er èppis *schryynere*?

tut ihr etwas schreiner-Inf

君たちは日曜大工で何か作るの？

柴崎 (2014: 36)

迂言形が使用される統語的環境は、他の上部ドイツ語方言と同様、命令文 (68)、疑問文 (69)(70)、副文 (66) と多くの文タイプに及ぶ。

3.6. 上部ドイツ語における「不定詞+tun」迂言形の談話機能

前節までは、上部ドイツ語方言の迂言形を3節に分けて論じたが、先行研究では上部ドイツ語全体についての指摘も存在する。本節では、Abraham/Fischer (1998) 及び Abraham (2005) で論じられた、上部ドイツ語における「不定詞+tun」迂言形の談話機能を扱う。

バイエルン方言、スイスドイツ語、アルザスドイツ語では迂言形が接続法の表示に用いられるが、その一方で、明確に接続法を示す総合的形式も残っている。接続法の語形が残っているのも関わらず、なぜ迂言形が使用されるのだろうか。Abraham/Fischer (1998) は、上部ドイツ語の「不定詞+tun」迂言形の使用に、本動詞のレーマ化という談話機能的な要因が働いていると指摘した。標準ドイツ語では、定動詞を左枠に置くというV2語順の原則のため、本動詞の不定詞を前域に置き、それを話題・焦点として提示する文は、左枠が空の限り認められず(16d)、左枠を埋めるためtun-迂言形が使用される。上部ドイツ語ではこのような場合だけでなく、本動詞を新情報として右枠に置き、レーマ化するためにも「不定詞+tun」迂言形が用いられるという。

Abraham (2005) は、なぜ上部ドイツ語が情報構造を優先する言語であるかということに関して、2つの特徴を挙げている。その1つは上部ドイツ語が基本的に書き言葉ではなく、話し言葉だということである。話し言葉において聞き手は短期的な記憶を頼りにして話し手の発話を理解する。しかし、人間の短期的な記憶には限界があるので、話し言葉では情報構造に沿わない文は嫌われ、情報構造に沿った理解しやすい文が好まれる傾向にあるという。話し言葉である上部ドイツ語においては、「旧→新」の順序で情報を伝えることが重要になるという。もう1つは、上部ドイツ語における過去形の消失である。今日の上部ドイツ語では過去形は存在せず、完了形がその意味を引き継いでいる。Abraham (2005) はこの移行を談話機能に適さないS-V-Oの構造から談話機能に適したS-Aux-O-Vの構造への移行の一部であると見なして、上部ドイツ語の迂言形がS-Aux-O-Vの構造の実現の一翼を担っていると指摘した。

関連する指摘は文法書などにも見られる。Merkle (1984²: 66) は、バイエルン方言のdoa-迂言形に関して、右枠に本動詞を置く構文が好まれる(beliebt)としており、また、アルザスドイツ語のtüen/düen-迂言形に関して柴崎(2014: 34)は、不定詞を右枠に置くタイプのtüen/düen-迂言形が「語用論的な機能」を担っていると記述している。

3.7. ドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形のまとめ

本節で扱われたドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形を、統語的分布と用法の観点からまとめる。まず統語的分布の概略を表4に載せる。表4を見ると、標準ドイツ語の tun-迂言形と異なり、方言における迂言形が様々な環境で使用されていることがわかる。標準語の tun-迂言形が主文で本動詞を前域に置く形でしか用いられないのに対し、方言における「不定詞+tun」迂言形は、本動詞を右枠に置く文や命令文、疑問文、さらには副文においても使用される。その分布は、方言間で共通しているわけではなく、諸方言の間には大きな差が存在し、全ての方言に共通しているのは、主文で本動詞を前域に置く文型のみである。覚知 (印刷中) の調査から分かるように低地ドイツ語の doon-迂言形は副文に偏り、逆に上部ドイツ語においては、平叙文、命令文、疑問文を含む主文で使用され、副文では避けられる傾向にある。上部ドイツ語の迂言形が副文において使用されにくいことがはっきりと論じられることは少ないが、個々の方言の記述では、そのような傾向に対する言及が散見される (Eroms (1984: 132) の (42) に対する記述や、Schönenberger/Penner (1995: 319) の (61) に対する記述)。

表4: ドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形の統語的分布

		低地ドイツ語	中部ドイツ語	バイエルン方言	スイスドイツ語	アルザスドイツ語
主文	平叙文 (本動詞前域)	○	○	○	○	○
	平叙文 (本動詞右枠)	×	○	○	○	○
	命令文	×	○	○	○	○
	疑問文	×	?	○	○	○
副文		○	△	△	△	△

文タイプその他、他の迂言構文との関係についても、興味深い例が散見される。通常「不定詞+tun」迂言形は、完了形など他の迂言構文と共起しないことが多いが (32a) (43)、受動の助動詞や完了形と共起する例が見られる場合があった (45) (62)。私見では、これらの例は、使役や接続法の表示というはっきりとした用法が確立しているため、言い換えれば文法化の度合いが高いため、このような文型が許容されていると考えられる。

(32a) md. *Ek höbb gedohn lihre. (完了形 : ラインフランケン方言)

ich habe getan lernen-INF

Müller (1964: 1447)

(43) bair. *Mià ham awàdn dö. (完了形)

wir haben arbeiten-INF getan

Merkle (1984²: 67)

(45) bair. I dààd gfràgd weàn. (受動の助動詞)

ich täte gefragt werden-INF

私は尋ねられる

Merkle (1984²: 64)

(62) schwz. Sie heind iro Stall tuon z'flättigun. (使役：ヴァリス方言)

sie haben ihren Stall getan zum-Reinigen

彼らは彼らの畜舎を掃除させた

Schwarz (2009: 23)

また、諸方言における「不定詞+tun」迂言形には、用法の点でも大きな差異が存在する。表5に、これまでの研究で挙げられた迂言形の用法を載せる。

表5：ドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形の用法 (使役を除く)

	低地ドイツ語	中部ドイツ語	バイエルン方言	スイスドイツ語	アルザスドイツ語
話題化・焦点化	○	○	○	○	○
形態的簡素化	○	○	○	○	○
韻律	○	×	×	×	×
時制表示	○	—	—	—	—
接続法の代用 (非現実モダリティ)	△	—	—	—	—
接続法表示	—	○	○	○	○
語調緩和	×	?	○	○	○
レーマ化 (談話機能)	×	?	○	○	○
アスペクト	△	△	△	△	△
未来表現	×	△	×	×	×

表5には10個の用法が載せられているが、そのうち各方言に共通しているのは本動詞の話題化・焦点化用法と形態的簡素化用法のみである。アスペクト用法も全ての方言において言及されており、共通しているように見えるが、習慣相や進行相など方言によって表すアスペクトの定義が微妙に異なるうえ、先行研究ではアスペクト用法の存在自体に関する疑問も提示されている。低地ドイツ語 doon-迂言形のアスペクト用法の不確かさは3.1節で述べたとおりだが、中部アレマン方言の調査を行った Schwarz (2009) も、迂言形のアスペクト用法を明確に確認できないと結論付けている。したがって、これらのアスペクト用法は完全に否定することはできないものの、再検証が必要だと思われる。

全ての方言に共通する話題化・焦点化及び形態的簡素化用法以外のうち、筆者が確実なものと考えているのは、韻律・時制表示・接続法表示・語調緩和・レーマ化の5つである。未来表現用法は、中部ドイツ語でしか挙げられておらず、それについての記述も少ないため、ここでは不確実なものとした。この5つのうち、接続法表示・語調緩和・レーマ化は上部ドイツ語で、韻律・時制表示は低地ドイツ語において確認でき、「不定詞+tun」迂言形の分布と用法は、南北で大きく分かれていることが分かる。中部ドイツ語の don-迂言形は、研究が少なく、どちらか一方に分類することは難しいが、低地ドイツ語の doon-迂言形よりもむしろ上部ドイツ語の迂言形に共通点が多いと言える。

4. まとめ

以上、2節では標準西ゲルマン諸語の「不定詞+tun」迂言形を概観し、その用法が規範意識と密接に関係した「論理性」によって制限されていることを見た。3節では、ドイツ語諸方言における「不定詞+tun」迂言形を概観し、それらの分布・用法が低地ドイツ語と上部ドイツ語で大きく異なることを見た。本節では、前節までの観察から、これら「不定詞+tun」迂言形に共通する特徴を挙げ、まとめとする。

西ゲルマン諸語の「不定詞+tun」迂言形は、言語・方言の間で差異が大きい、共通している用法もある。話題化・焦点化用法がそれで、これは「不定詞+tun」迂言形の存在が確認できないルクセンブルク語とアフリカーンス語を除くと、本稿で扱った全ての言語・方言に備わっている。標準語では、オランダ語 *doen*-迂言形の使役用法を除けば、話題化・焦点化用法以外の用法は認められない。2節で見たとおり、これは「論理性」を伴っていない迂言形が排除されるためである。一方で、ドイツ語諸方言では、話題化・焦点化用法以外にも多様な用法が存在する。低地ドイツ語の *doon*-迂言形は、副文末で主に韻律形成や時制表示に使用され、上部ドイツ語の迂言形は、主に主文で接続法表示や語調緩和などに使用される。また、3.6節で見たように、上部ドイツ語の迂言形は、主文において本動詞をレーマ化するという談話機能的な目的で使用される。

筆者は、これら語彙的意味を持たない「不定詞+tun」迂言形の用法は、当該言語・方言の構造的特徴を反映しているという点で共通していると考える。上部ドイツ語の迂言形が接続法表示・語調緩和・動詞のレーマ化などの用法を持つものに対して、低地ドイツ語の *doon*-迂言形は韻律用法や形態表示用法を持つ。この用法と対応するように、上部ドイツ語では接続法が残っており、過去形が存在せず、対照的に低地ドイツ語では接続法が消失し、過去形が保たれている。また、迂言的構文が多い上部ドイツ語では、それが情報構造に転用されやすいという事情がある。両方言における「不定詞+tun」迂言形の分布・用法の差異は、*tun* に当たる動詞に語彙的意味が存在しないため、両方言の構造的差異が「不定詞+tun」迂言形に強く反映された結果と考えられる。また、標準ドイツ語・オランダ語・西フリジア語における「不定詞+tun」迂言形が「論理性」によって制限されているという事情も、標準語の持つ規範意識の高さを反映していると言えるだろう。したがって本稿は、西ゲルマン諸語における「不定詞+tun」迂言形の用法が、各言語・方言の構造的特徴に依存していることを主張する。

本稿の主張をより確かなものとするためには、さらなる実証的研究が必要であり、以下に明らかにすべきいくつかの問題点を挙げる事ができる。まず、本稿で不確かであると判断されたアスペクトや未来表現などの用法に関して、これらがどのようなアスペクトを扱っているかという点と、どれくらい用いられるかという点で、さらなる調査が必要である。また、本稿では本動詞の話題化・焦点化用法をV2語順と関連付けて論じたが、V2語順を持つアフリカーンス語で、迂言形による本動詞の話題化・焦点化が確認されない理由が明らかになっていない。その他、迂言形が使用される統語的分布について、本稿では他の迂言構文と共起している例がいくつか見つかったが、この迂言形が

どのような条件で他の迂言構文と共起可能かという問題も挙げられる。ドイツ語以外の方言についても、今の段階では未調査であり、本稿の主張はいまだ仮説の域を出ない。今後はこれらの点について調査を進め、この仮説の詳細な検証を行う。

参考文献

- Abraham, W. (2005) Präteritumschwund und das Aufkommen des analytischen Perfekts in den europäischen Sprachen. In: Eggers, E. et al. (Hrsg.) *Moderne Dialekte*. 115-134. Stuttgart: Steiner.
- Abraham, W./Fischer, A. (1998) Das grammatische Optimalisierungsszenario von *tun* als Hilfsverb. In: Donhauser, K./Eichinger, L. M. (Hrsg.) *Deutsche Grammatik - Thema in Variationen*. 35-47. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Bangma, J. (1992) *Wolkom! — Kursus Frysk ferstean en lêzen*. Ljouwert: Algemene Fryske Underrjocht Kommissje.
- Bangma, J. et al. (1998) *Flotwei Frysk*. Ljouwert: Afûk.
- Barbiers, S. et al. (2008) *Syntactische Atlas van de Nederlandse Dialecten — Deel II — Commentaar*. Amsterdam: Amsterdam University.
- Davis, N. (1971) *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. London: Oxford University Press.
- Duden. (1999) *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Engel, U. (1991² (1988)) *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Julius Groos.
- Eroms, H. W. (1984) Indikativische periphrastische Formen mit *doā* im Bairischen als Beispiel für latente und virulente syntaktische Regeln. In: Wiesinger, P. (Hrsg.) *Beiträge zur bairischen und ostfränkischen Dialektologie*. 123-135. Göppingen: Kümmerle.
- Eroms, H. W. (1998) Periphrastic *tun* in present-day Bavarian and other German dialects. In: Tieken-Boon van Ostade, I./Van der Wal, M./Van Leuvensteijn, A. (Hrsg.) *DO in English, Dutch and German*. 139-157. Münster: Nodus.
- Frank, A. (2013) *Het Achterhuis*. Amsterdam: Prometheus.
- Grimm, J./Grimm W. (1993) *Grimm Märchen Plattdüütsch vertellt*. übersetzt von Bullerdiek, B. et al. Hamburg: Quickborn.
- Grimm, J./Grimm W. (1995) *Grimm weitere Märchen Plattdüütsch vertellt*. übersetzt von Bullerdiek, B. et al. Hamburg: Quickborn.
- Haeseryn, W. et al. (1997) *Algeneme Nederlandse Spraakkunst*. Groningen: Nijhoff.
- Hodler, W. (1969) *Berndeutsche Syntax*. Bern: Francke.
- 覚知頌春 (印刷中 2018) 「低地ドイツ語における *doon*-迂言形の特徴」『ドイツ文学』156. 日本独文学会.
- Keseling, G. (1968) Periphrastische Verbformen im Niederdeutschen. In: *Niederdeutsches Jahrbuch*. 98. 139-151.

- Kinau, R. (1973) *Bi uns an'n Diek*. Quickborn: Hamburg.
- Langer, N. (2001) *Linguistic Purism in Action - How auxiliary tun was stigmatized in Early New High German*. Berlin: Gruyter.
- Marti, W. (1985) *Berndeutsche Grammatik*. Bern: Francke.
- Merkle, L. (1984² (1975)) *Bairische Grammatik*. München: Heinrich Hugendubel.
- Meyer, G. F. (1983² (1923)) *Unsere plattdeutsche Muttersprache*. St. Peter-Ording: H. Lühr & Dircks.
- Müller, J. (1964) *Rheinisches Wörterbuch*. Bd. 8. Berlin: Erika Klopp.
- Pinheiro-Weber, U. (2010) *Bärndütsch — Ein Lehr- und Lernbuch*. Bern: HEP.
- Rohdenburg, G. (1986) Phonologisch und morphologisch bedingte Variation in der Verbalsyntax des Niederdeutschen. In: *Niederdeutsches Jahrbuch* 109. 86-117.
- Rohdenburg, G. (2002) Die Umschreibung finiter Verbformen mit doon 'tun' und die Frikativierung stammauslautender Plosive in nordniederdeutschen Mundarten. In: *North-Western European Language Evolution (NOWELE)* 40. 85-104.
- Rowling, J. K. (2000) *Harry Potter en die toenaar se steen*. übersetzt von Oosthuysen, J. Cape Town: Human & Rousseau.
- Rowling, J. K. (2002) *Harry Potter und de Wunnersteen*. übersetzt von Cyriacks, H. und Nissen, P. Kiel: Michael Jung.
- Schanen, F./Zimmer, J. (2005) *1,2,3 Letzëbuergesch Grammaire — 1 Le Groupe Verbal*. Esch-sur-Alzette: Schortgen.
- Schobinger, V. (2001² (1984)) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger-Verlag.
- Schönenberger, M./Penner, Z. (1995) Probing Swiss-German Clause Structure by means of the Placement of Verbal Expletives: Tun “do” Insertion and Verb Doubling. In: Penner, Z. (Hrsg.) *Topics in Swiss German Syntax*. 291-330. Bern: Lang.
- Schwarz, C. (2009) *Die 'tun'-Periphrase im Deutschen*. Saarbrücken: Dr. Müller.
- 柴崎隆 (2014) 「アルザス語の助動詞 tüen/düen (dt. tun) の用法と機能」 『ドイツ文学』 150. 日本独文学会. 28-47.
- Thies, H. (2011) *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholz.
- Van der Horst, J. M. (1998) Doen in Old and Early Middle Dutch — A comparative approach. In: Tiekens-Boon van Ostade, I./Van der Wal, M./Van Leuvensteijn, A. (Hrsg.) *DO in English, Dutch and German*. 53-64. Münster: Nodus.
- Weber, A. (1987) *Zürichdeutsche Grammatik*. Zürich: Hans Rohr.
- Weise, O. (1900) *Syntax der Altenburger Mundart*. Leipzig: Breitkopf & Härtel.
- Weiss, E. (1956) *TUN:MACHEN — Bezeichnungen für die kausative und die periphrastische Funktion im Deutschen bis um 1400*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Zehetner, L. (1985) *Das bairische Dialektbuch*. München: Beck.